発達支援センター通信

◆野洲市発達支援センター　TEL587-0033、FAX587-2004

広報「やす」：2022 年 11 月号掲載

発達障がいとそれを支える家族

発達障がいのある人は様々な特性があることが知られています。集団行動よりも一人で過ごすことを好んだり、変化が不安で一定のパターンが安心できる、興味関心の幅が狭く深い、などです。発達障がいは生まれつきみられる脳の働き方の違いにより、行動面や社会性に特徴があると言われています。社会と関わりを持ち始める 1 歳代頃からその特徴が明確になってくる場合が多く、最初は家庭での対応が主になります。

発達障がいのある人の中には「共感的な振る舞いがしにくい」「相互的なコミュニケーションが取りにくい」などの特性を持つ人があり、それに対応する家族は感情や情動、関心といった「気持ちの通じ合い」を感じにくい状況で子育てをすることとなります。小さい子どもと関わるときには、大人同士よりもコミュニケーションにおいてはコツが必要になりますが、発達障がいのある子どもの場合はさらなる工夫が必要ということになります。

人間関係において、自分の気持ちが相手に通じにくいということは苦しいことです。「自分の気持ちを相手に分かってほしい」という気持ちは誰にでもあるものだからです。発達障がいのある人のご家族はこのような困難さを日々感じています。「介護疲れ」という言葉があるように、発達障がいに関わる人も自身が疲れ果ててしまい、中には体調を崩してしまう場合もあります。こうなると、ますますご本人への支援ができにくくなってしまいます。

また、世間からは「子どもは〇〇で当然」「親とは△△であるべき」などのステレオタイプな視線を受ける場合もあり、その困難さを周囲に分かってもらえないつらさを抱えている人も多いのです。当然のことながら、障がいがあるご本人は脳の働きからそのような行動になるだけで、周囲を困らせようとしているわけではありません。発達障がいに関しては、少しずつ理解が広がってきているところですが、その周囲の人への影響についてはまだあまり知られていないのではないでしょうか。

一見ごくありふれた家庭に見える中にも、このような悩みを抱えている人がいるかもしれません。その対応は一言で語れるものではありませんが、このようなことがあるかもしれないと心に留めている人が増えるだけで、抱える困難さは軽減されるのかもしれません。